（タスマニア 5）

タスマニアの西部山岳地帯の北端にクレイドルマウンテン国立公園がある。豊かな大自然と野生の動植物が残されているとして、世界自然遺産にも認定されている。タスマニアでは必見の場所の一つといえる。公園内のロッジに二泊して周囲の自然を満喫しようとホバートを出発した。途中少々、回り道をして、タスマニアの人々に人気のピクニック地であるセントラルハイランドを通る予定になっていた。

ボスウエル（Bothwell）

ホバートから車で北方向に走り、約一時間の所にある小さな町で休憩をとった。アンドリューの説明ではこれから北にある湖水が点在している高山地区（セントラルハイランド）の入り口であり、のどかな田園風景が見られるので、都会からピクニックやハイキングに来る人達には人気のある町のようである。休憩でなく、わざわざ立ち寄ってくれたのだ。

写真に見るように小さな町だ。石碑が有るので、ここが町の中心らしい。周囲を見ても高い建物はない。

町で最も高い建物は教会である。建物からイギリス教会であることがわかる。その周囲にはいかにも古そうな墓碑や墓が点在していた。

教会の隣には下の写真のような石造りの建物があり、「ゴルフ博物館」のプレートが出ていた。

我々は全く知識がなかったが、どうやらタスマニアの中では歴史のある場所らしい。近くの小さなバス停には手書きでスケッチポイントの案内図が貼ってあった。十箇所くらいの場所を矢印でつないでいるだけの簡単なものだが、これがあるということはスケッチに訪れる人がいるということだ・

ここで聞いたことと後で調べたことをまとめるとボスウエルはこんな町である。2006 年の段階で人口が 376 人とあるから、すこぶる小さい町である。1820 年スコットランドの開拓者が入植したと案内に書かれている。比較的早い時期に流刑者でなく開拓者としてここに入植した人たちが築いた生活の場であり、町である。それなりの意気込みが残されている。ボスウエルは英国スコットランドの南ランカシア州に同名の町がある。そこから来た開拓者が故郷の名前をつけている例は新大陸では多い。

オーストラリアで初めてつくられたゴルフコースが郊外にもうけられ、前頁にあるオーストラリアでは唯一の「ゴルフ博物館」がある。ここはオーストラリアゴルフの発祥の地なのだ。もともとゴルフはスコットランドの羊飼いが石ころを木の棒で叩いて遊んだことから始まったと言われている。開拓者たちが手作りの道具で仕事の合間に楽しんでいたのだろう。

この他のも往時をしのばせる石造りの建造物が数多く残されていて、その中にはスコッチモルトの蒸留場もあるらしい。そんな見所がバス停の手書きの案内に書かれてあったようだ。一回りしたかったが残念ながらその時間がなかった。

駐車した場所の周囲にあった住宅は落ち着いた雰囲気のする質素なつくりであった。

タスマニアビーフとアボリジニ

タスマニアの中央部に行くにしたがって大草原が広がり、放牧された牛の姿が見えてくる。

「タスマニアのビーフは牧草だけで育っている。人工飼料を使用している所はどこもない。しかも十分な牧草があるので、昼過ぎには満足してすべての牛は寝そべっている。だから美味しいのだ」と地元の人たちは述べていた。山に緑の草原、それに牛の姿といかにも牧歌的である。

この地は先住民族のアボリジニの居住地でもあった。南インド系と言われている彼らは太古の時代にオーストラリア大陸に渡り、その中の一派がタスマニアに移り住んだものといえる。洞窟に住み、採取狩猟して暮らしていた。ブーメランで

狩をすることと点描の独特の絵画で知られている。ヨーロッパの流刑囚や開拓者がやってきた初期の時代には迫害を受けて一気に人口が減少してしまったが、現在では保護され、人種差別もなく主として都会で生活している。自分たちの生活基盤が牧場になり、経済林になってしまっているからだ。

牧場に隣接した丘の崖にある昔、彼らが生活していたといわれている洞窟を見学した。案内してくれたのはアボリジニの末裔で伝統文化の研究者と称する初老の男だった。

崖に開いた洞窟は石灰岩の裂け目で大きくない。背丈の倍くらいの高さで奥は真っ暗で見えないがそんなに深い印象ではない。実際には洞窟前の木の小屋で生活していたらしいが妊婦が子供を産むときにはこの神聖な洞窟に一人で入り、産んで出てくるまでは何人も入ることが出来ない。そんな慣わしがあったといっていた。

ちょっとした野外博物館、小屋には往時に使っていたブーメラン、木槍、棍棒の狩猟具が展示されている。火の儀式やシロアリで中空になった木を使ったディジリドウと呼ばれている大笛や打楽器の実演を見学し、薬用茶を飲ませてもらう。先住民の素朴な生活がしのばれる場所になっている。案内してくれたアボリジニの男はここで先住民の生活を観光で訪れた人に紹介し、自分たちの描いた伝統絵画を販売して生計をたてている。もちろん、政府の保護を受けてのことである。

右の写真は洞窟の前に広がった牧場の景色である。往時とは風景が一変しているに違いない。文明が突如として押し寄せてきたとまどいが判るような気がする。今では同化して文明生活をおくっているが、一昔前はこののどかな田園風景も争いの耐えない場所であったのかもしれない。歴史によれば当時、五千人くらいのアボリジニがタスマニアに住んでいて、それが迫害を受けて絶滅したといわれている。今すんでいる人たちはその後オーストラリア大陸のほうから移り住んだものと思われている。

グレートレーク

ボスウエルから北へ更に進むとセントラルハイランドの湖沼地帯に入る。多くの湖の中では大きいグレートレークの湖畔にあるホテルに駐車して周囲の散策をした。

ホテル前の駐車スペースから湖が見える。グレートレークというだけあって大きい。ハイキングや行楽のピクニックに人気らしいが、Xマスに近い時期なので人影は見られない。我々の他にはホテルの中で数人がTVでゴルフの中継を見ながらビールを飲んでいた数人だけだった。他に観光地の施設は何もない。純粋に自然を楽しむ場所の感じがする。

ごく一部しか散策できなかったがそこで実際に見た景色をまとめておく。

上段の写真は湖の風景。トレッキングロードに休憩所が用意されているがホテル以外に建物は見当たらない。二段目の左は山方向の風景で岩場が多く、樹木はやはりユーカリ種が多く見られる。
右の緑の丸い物は石の上に生えた蘚苔類、表面の葉が固い。タスマニアの固有種らしい。下段の三枚は散策中に見つけた花。左下は左上のアップである。

右の写真はホテル（ロッジ風）の食堂部分から見た湖の一部である。我々はここで風景を愛でながらのランチをした。